

## 横浜正金銀行上海支店（一九〇〇—一三年）

——香港上海銀行・チャータード銀行との比較を通じて——

蕭 文 嫻

はじめに

本稿の課題は近代日中両国間の金融関係の特徴を、横浜正金銀行（以下正金と略称する）上海支店と、同行より先に中国に進出した英系資本の香港上海銀行（Hongkong and Shanghai Banking Corporation、以下HSBCと略称する）とチャータード銀行（Chartered Bank of India, Australia and China、以下CBと略称する）の上海支店、この両者の比較を通じて考察することである。

二〇世紀初頭以降の正金に関する研究は多くあるが、<sup>①</sup>「満州」を除く中国への進出についての研究は平智之の論

文のみである。同論文は中国にある上海、天津等の支店の預金・貸出・為替業務や政治借款等を検討したが、正金を在中国における他の外国銀行と比較するという視角を持っていない。そのため、横浜正金銀行が中国に進出する際、同行が中国でどのような位置を占め、現地経済とどのような関わりを持っているかなどの点について十分に検討されたとはいえない。他方、HSBCとCBについては、社史を含めたいくつかの研究があるが、いずれも銀行経営の全体を取り扱うものであり、本稿の対象時期における上海支店に焦点をあてているものはなかった。

上海は中国の最大の金融センターであり、中国進出の成

就上海での経営の成功・失敗によって規定される。上海の外国銀行について、中国の伝統金融機関である錢莊への外国銀行による短期貸付を検討した西村閑也の優れた研究<sup>(3)</sup>は、錢莊への短期貸付が上海金融を支配する手段ではないと結論づけた。ここでは、同研究を踏まえて、正金上海支店の経営を預金業務・貸出業務・銀行券発券業務の三分野を中心に具体的に分析したいと考える。為替業務が外国銀行の経営の柱ではあるが、これに触れず、現地業務に焦点を当てたのは、為替業務の会計方法が異なるため、比較することが困難であるからである。とはいえ、現地業務の多くは貿易と関連付けて行われるので、為替業務の一端を側面から見るができるのではなからうかと思う。

ここで使われている正金の『半期報告』や、東洋支店長会議録は『横浜正金銀行史資料』（日本経済評論社復刻版、一九七六年）に収録されており、一九〇八年以降の報告書は大蔵省『銀行及担保付社債信託事業報告』に記載され、日本の国立国会図書館近代デジタルライブラリーでアクセスすることができる。またHSBCに関して、主に行内の調査報告書が利用され、そのすべてはロンドンにあるHSBC Group Archivesに所蔵されている。CBに関して、

主に上海支店のバランスシートを使用した<sup>(4)</sup>が、それは現在ロンドンにあるLondon Metropolitan Archivesに所蔵されている。以上の史料を利用して、上記の課題に接近したいと思う。

## 一 日中貿易の拡大

この時期の日中両国間の経済関係は貿易が主軸になっている。日中両国の貿易は一八九一年から一九一三年の間に急速に拡大した。日本の中国への輸出はこの二二年間に<sup>(5)</sup>おいて五八〇万円余りから一億五四〇〇万円まで増加し、また同期間の日本の中国からの輸入も八七九万円から六一二二万円に増大した。一九一〇年、対中貿易の日本の対外貿易に占める割合が約三割となり、中国は日本にとってかなり重要な貿易相手国となった。他方、日本の中国の対外貿易に占める割合も急速に増大し、中国にとっても日本が重要な貿易相手国となった。このように、両国の経済的な相互依存がこの間急速に高まった。

日本からの輸出品内容を見ると、一九〇一年には綿糸が最も重要であり、一九一一年になると、綿糸に加え、綿布・マッチが輸出品の上位を占めるに至った。これは産業

革命によって経済発展した日本が中国市場を積極的に開拓した結果と言える。綿糸・綿布・マツチは主に神戸港と大阪港から輸出された。上海は輸入に関して中国の最も重要な港であるので、上海と大阪との間の経済関係はそのころから密接であった。もっとも、日本の中国からの輸入品の内容は大きく変化はしていない。この間において砂糖と、油粕や豆類などの肥料が一貫して主な輸入品であった。

日中両国の貿易拡大の背景には、日本の経済発展という経済的要因とともに、日清戦争・日露戦争を通じて中国をはじめとするアジア全体における権益の拡大を図ろうとした日本の国策もある。貿易の拡大には金融面のサポートが欠かせない。この時期のアジアの貿易金融はどのように行われてきたであろうか。

## 二 東アジアにおける国際銀行の展開

中国と日本を含めたアジアの貿易金融は、一八八〇年代に至るまでは、主に英系資本の国際銀行によって行われていた。しかし、一八八〇年代以降に変化が見られた。

表1に示されるように、一九一三年において、東アジアには一〇以上の国際銀行が進出している。こうした国際銀

行は例外なく中国に支店を持っていた。上海支店の設立時期を見ると、一八八八年以前に上海支店を設立した銀行は二行に過ぎず、二つとも英系国際銀行であった。しかし、一八八九年以降、国際銀行が続々と上海に進出し、一九〇二年になると、上海には一〇以上の国際銀行の支店がある。その多くは、いわゆる帝国主義的な権益拡張という政治目的を果たすために設立された。当然ながら、一九〇〇年代の上海金融市場では国際銀行間において熾烈な競争が繰り広げられた。

日本政府は、当時英系銀行によって支配されていた日本の為替市場の商権を回復するために、一八八〇年に横浜正金銀行を設立した。同行は、貿易に関連する為替業務を専門とする特殊銀行であり、政府から多くの特権および資金支援を賦与された。しかしながら、一八九五年以前の同行はまだ資金力が弱く、日清戦争の賠償金の取り扱いを契機に急速に成長していく。

正金も一八九〇年代以降に中国に進出した国際銀行の一つである。同行の中国における支店網の展開は図1に示されている。上海支店、香港支店及び漢口支店を除けば、同行の支店は華北と中国の東北（すなわち満州）を中心に設

表1 東アジアに進出した主な国際銀行(1913年)

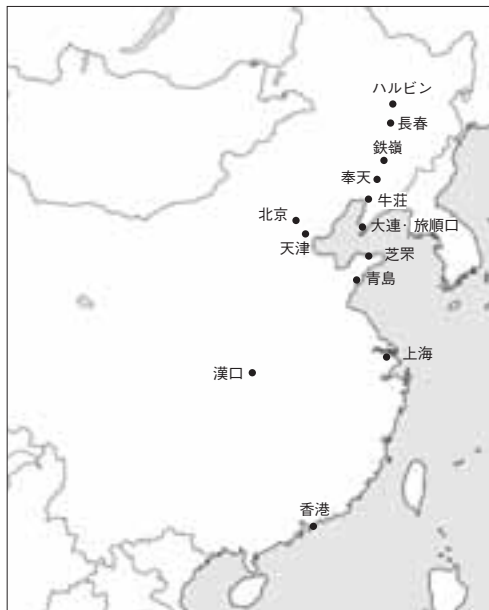
銀行名	国籍	設立年次	本支店数				上海店 設立年	横浜店 設立年
			中国*	インド	日本	東南ア ジア		
チャータード(CB)	英	1857	6	7	2	18	1857	1880
香港上海(HSBC)	英	1864	8	3	4	13	1865	1866
マーカントイル	英	1892	1	9	0	6	1893	—
横浜正金(正金)	日	1880	15	2	4	0	1893	1880
独亜	独	1889	6	0	2	0	1889	1905
露亜	露	1896	8	2	1	0	1896	1898
インドシナ	仏	1875	6	1	0	8	1898	—
インターナショナル	米	1901	5	2	2	3	1902	1902
ベルギー	白	1902	3	0	1	0	1902	—
和蘭	蘭	1824	2	0	0	4	1902	—

注1：\*香港を含む中国国内の支店数。

注2：チャータード銀行は Chartered Bank of India, Australia, and China、香港上海銀行は Hongkong and Shanghai Banking Corporation、マーカントイル銀行は Mercantile Bank of India、独亜銀行は、Deutsch-Asiatische Bank、露亜銀行は Banque Russo-Chinoise、インドシナ銀行は Banque de l'Indochine、インターナショナルは International Banking Corporation、ベルギー銀行は Banque Belge pour L'Etranger、和蘭銀行は Nederlanische Handel-Maatschappij の略称である。

出所：アジア各地にある店舗数に関して、チャータード銀行については Mackenzie, Compton, *Realms of Silver*, 1954、香港上海銀行については、King, Frank H.H., *the Hongkong Bank in the Period of Imperialism and War 1895-1918: Wayfoong, the Focus of Wealth*, Cambridge Univ. Press, 1988, p.92、マーカントイル銀行については、西村閑也「英系国際銀行とアジア、1890-1913年(3)」(法政大学『経営史林』41巻2号、2004年)、独亜銀行については西村閑也・赤川元章・鈴木俊夫『国際銀行とアジア』(慶応義塾大学出版会、2011年出版予定)、インドシナ銀行については、権上康男『フランス帝国主義とアジア—インドシナ銀行史研究—』(東京大学出版会、1985年)、その他の諸銀行については、横内正雄「第一次大戦前における東洋為替銀行の組織的行動」(権上康男・広田明・大森弘喜編『20世紀資本主義の生成—自由と組織化—』東京大学出版会、1996年)より作成。横浜店設立年及び日本国内本支店数については立脇和夫『在日外国銀行百年史』(日本経済評論社、2002年)20頁より作成。その他は東亜同文会編『支那経済全書第6輯』(東亜同文会、1908年)809~14頁より作成。

図1 横浜正金銀行の中国における支店展開(1913年)



置され、一九一三年に至ると、在中國の支店が一三となり、在中國の外国銀行の中で支店数が最も多い銀行であった。一九〇九年、同行は、アジア最大の為替市場である上海にある支店を日本及び中国における同行の中央為替統務店として、銀通貨圏との間の為替取引を同支店に集中させた。これは上海の重要性をうかがわせるものである。

では、正金上海支店の経営実態を見てみよう。ここでは、特に現地での預金業務、貸付業務及び銀行券発行業務を中

心に検討してみる。

### 三 正金・HSBC・CBの現地業務比較

#### (1) 預金業務

表2は、正金、HSBCとCBそれぞれの上海支店の預金業務を比較したものである。まず、預金業務では、HSBCが三行の中で圧倒的なシェアを占めていたことが分かる。しかし、預金合計高の増加率を見ると、一九〇〇年から一九一三年の間に、正金は八倍以上に増加したのに対して、CBは二倍余り、またHSBCも(一九一〇年までというより短い期間であるが)二倍余りにしか増加していない。一九〇三年になると、正金の預金は先発のCBを上回るようになった。

こうした預金の急速な拡大は、一九〇二年に正金が銀通貨圏の預金吸収を促進するために、「在清国各店資金運転方針」という新たな経営方針を打ち出したからである。その背景には、日本が一九七七年に金本位制に移行したことがある。そのため銀が流通している中国との間で金銀価格変動による為替リスクが高まり、銀通貨圏の資金を現地預金で吸収する必要が生じた。そこで、同行上海支店は他の

(単位：千上海兩)

HSBC			
定期預金	当座預金		合計
	A	B	
5,041	7,198	12,239	59%
7,677	9,806	17,483	56%
6,336	9,967	16,304	61%
6,173	8,667	14,940	58%
6,614	9,791	16,405	60%
7,059	9,215	16,274	57%
5,939	9,364	15,303	61%
5,300	10,200	15,500	66%
7,200	14,400	21,600	67%
7,800	19,000	26,800	71%
8,650	24,000	32,650	74%
8,700	17,850	26,550	67%
11,740			
11,922			

外国銀行よりも高い金利を与えることになったのである。さらに、一九〇八年の不況により、資金過剰に陥ったにもかかわらず、同行はC B、H S B Cの預金金利引き下げに追従しないことにより、C B、H S B Cと同じような預金減少を見なかった。

正金の預金業務のもうひとつの特徴として当座預金の預金全体に占める割合がC B、H S B Cと比較してかなり低いことを挙げるができる。特に、一九〇五年、〇六年は一〇%台まで落ち込んだ。それに対してH S B Cは六〇%近くから七〇%台、C Bは四〇%近くから七〇%台にあった。当座口座は一般的に外国商人によって開設される。H S B Cの報告書によれば、一九一二年一月の同行の両建

て当座口座数は三四九〇にのぼり、弗(メキシコドル)建て当座口座数は三二〇八である。<sup>(7)</sup>一九一〇年の上海の共同租界と仏租界の両租界に住む外国人は合計で約一万五〇〇〇人である。このことを考えると、H S B Cがいかに外国人の間で利用されていたかがわかる。それに対して正金の預金全体に占める当座預金の比率が低かったことは、当座預金口座数が少なかったからであろう。それは後に見る当座貸出のあり方とも大きく関わってこよう。

## (2) 銀行券発行業務

銀行券とは、一覧払い手形のことであり、この銀行券を発行銀行に提示すれば、額面に書かれた金額の銀貨と引き替えることができる。当時の外国銀行は治外法権によって、自国の法律によって規制されていた。

外国銀行の上海での銀行券発行は少なくとも一九世紀七〇年代に遡るが、中国人の銀行券に対する不慣れや不信のために、また、関税の支払い手段として認められていなかったことから流通高が少なかった。一九〇〇年の義和団事件の際、上海道台(知事に当たる官僚)と各国領事との間で結ばれ

表2 外国銀行上海支店の預金構成(1900-1913年)

年末	正金					CB				
	定期預金	当座預金	別段預金	合計		定期預金	当座預金	短期預金	合計	
		A		B	A/B		A		B	A/B
1900	281	361	464	1,106	33%	904	1,105		2,009	55%
1901	383	458	157	998	46%	804	1,227		2,031	60%
1902	1,084	1,517	436	3,037	50%	1,886	1,184		3,070	39%
1903	1,025	1,381	763	3,168	44%	1,296	981		2,277	43%
1904	728	1,331	782	2,841	47%	856	1,218		2,074	58%
1905	826	491	2,234	3,551	14%	829	1,187		2,016	59%
1906	1,069	576	1,389	3,034	19%	807	1,221		2,028	60%
1907	1,360	829	432	2,621	32%	866	1,750		2,616	67%
1908	2,202	964	169	3,335	29%	1,393	1,786		3,179	56%
1909	2,571	982	170	3,723	26%	1,208	1,549		2,757	56%
1910	2,566	1,150	1,285	5,000	23%	1,178	2,950	113	4,241	70%
1911	2,703	2,237	1,126	6,066	37%	1,906	3,166		5,072	62%
1912	2,985	2,680	754	6,419	42%	3,345	2,591	170	6,106	42%
1913	3,340	2,995	2,567	8,902	34%	2,565	2,647	37	5,249	49%

注記：横浜正金銀行、チャータード銀行の数字は年末の残高である。香港上海銀行の数字は調査時期によって異なる。

出所：横浜正金銀行に関して、1900-1907年は、横浜正金銀行『半季報告』各季版により作成、1908-1913年は、大蔵省『銀行及担保付社債信託事業報告』(第33-38次)による。

チャータード銀行に関して、Chartered Bank of India, Australia and China, half-yearly branch balance sheet, 1858-1972, Vol.1-32, Guildhall Ms 31519による。

香港上海銀行に関して、Inspector's Report on Shanghai Branch, 1904, 1908, 1911, 1915による。

た「中西議定保護上海租界城廂」「中国・西洋間の上海租界保護議定書」において、上海金融の正常な運営を確保するために外国銀行と上海銭荘との間の協力関係を維持することが合意された。議定書の中では、銭荘の金銭出納の際においてその一部に外国銀行の銀行券を使用するという条項が記載され、これは中国官僚が外国銀行の銀行券の使用を正式に認める出来事であり、外国銀行の銀行券流通高の増加をもたらす契機となった。<sup>(8)</sup>

一九〇二年、正金は上海で銀行券を発行し始めた。その際、上海道台の同意書を受け取り、それを広告として利用し、また先に触れた銭荘の銀行券利用を受けて、中国人の間で普及させた。<sup>(9)</sup> 日露戦争後、日本政府は正金による中国関内各地の銀行券発行を規定するための法令を出した。その法的規定には主に、銀行券を発行する際、銀行券と同額以上の発行準備を保有すること及び券券銀行が政府の厳格な監督を受けることが書かれている。<sup>(10)</sup> これによって、正金は英系銀行であるHSBCとCBと同じように、銀行券発行にあたって厳

銀行券の流通高は季節性が強く、一月が最も多く、その後次第に減少する。それは旧正月の年末に需要が高いからである。流通高のうちのかんりの部分は後に見るチョップ・ローンという貸出を通じて行われた。表3に見られるように、正金は、銀行券発行高が急ピッチに伸び、一九〇二年～一九〇五年の間では約八倍に増大し、CBの発行高

しい規制を受けることとなった。

表3 外国銀行上海支店銀行券発行(1900-1913年)

年末	正金	シェア	CB	シェア	HSBC	シェア
1900			253			
1901			381			
1902	115		395		1,076	
1903	292		326			
1904	714		526			
1905	1,018		480			
1906	1,037	37%	503	18%	1,268	45%
1907	964		544			
1908	563		496			
1909	584	26%	408	18%	1,291	57%
1910	546		395			
1911	480	18%	587	22%	1,655	61%
1912	955		679			
1913	1,099		933			

注記：単位は千上海両。1908年以降の正金の銀行券発行高を1上海両=0.72弗で上海両に換算した。

HSBCに関して、日付が調査日によって異なるので、残高が年度末のものではない。

出所：1902～05年の正金の発券高に関しては、『明治大正財政史』第15巻、415～17頁による。その他は表2と同じ。

1913年)

(単位：千上海両)

CB						HSBC				
固定 ローン	銀行・ 銭荘貸付	当座貸越	利付為替手形 ・手形割引	合計		ローン	株式担 保貸付	当座貸越	合計	
		A		B	A/B			A	B	A/B
550	0	940	56	1,546	61%			1,974		10,000
491	620	1,275	6	2,392	53%			3,305		10,200
892	210	1,439	75	2,616	55%			3,159		14,500
371	682	878	157	2,088	42%	5,777	2,647	4,255	15,000	28%
383	594	717	304	1,998	36%	4,501	2,557	4,412	15,200	29%
887	322	983	78	2,270	43%	5,078	2,350	4,830	11,400	42%
1,118	810	1,083	2	3,013	36%	5,326	2,639	5,170	13,000	40%
1,114	231	829	13	2,187	38%	6,493	2,557	7,390	15,756	47%
1,100	322	990	37	2,449	40%	8,358	1,812	6,706	17,560	38%
1,326	955	847	218	3,346	25%	8,418	2,504	7,204	18,161	40%
848	605	979	8	2,440	40%	9,287	3,834	8,198	21,362	38%
775	508	1,197	3	2,483	48%	7,369	2,673	10,409	20,476	51%
1,032	0	1,904	19	2,955	64%					
990	25	1,744	63	2,822	62%					



を上回り、HSBCの発行高に迫った。だが、その後発行高は減少に転じ、一九一二年にようやく大幅に増加し始めたのである。HSBC・CBと比較して大幅に変動したところが正金の特徴と思われる。

一九〇八年になると、上海に進出していたほとんどの外国銀行は銀行券を発行するようになった。ある推計では、一九〇八年末の銀行券発行高は、中国通商銀行の一八〇万<sup>(12)</sup>弗、HSBCの一八〇万弗、CBの二〇万弗、独亜銀行の四〇万弗、華比銀行の三〇万弗、露清銀行の三〇万弗、正金の一二〇万弗、中国通商銀行以外の中国系銀行の三〇万弗となっている<sup>(13)</sup>。正金は発行高ではHSBCに次ぎ外国銀行の中で二位を占めていた。

### (3) 貸出業務

表4に見られるように、貸出業務も預金業務と同じくHSBCの規模が最も大きく、圧倒的なシェアを持っている。HSBCは一九〇四年～〇五年にかけて大幅な減少となったが、その後順調に拡大していた。一方、CBの貸出合計額は一九〇一年～一三年の間に増減しながら、二〇〇万兩台～三〇〇万兩台で推移していた。それに対して、正金の

表4 外国銀行上海支店貸出構成の比較(1900-

年末	正金				A/B
	定期 貸付金	当座貸越	利付為替手形 ・割引手形	合計	
		A	B		
1900	189	152	29	370	41%
1901	1,378	198	80	1,657	12%
1902	658	280	42	981	29%
1903	758	339	119	1,217	28%
1904	1,149	246	9	1,404	18%
1905	1,248	257	49	1,554	17%
1906	4,450	749	293	5,492	14%
1907	3,824	378	137	4,338	9%
1908	1,842	66	1,500	3,408	2%
1909	1,185	516	95	1,796	29%
1910	1,559	990	138	2,687	37%
1911	3,689	715	9	4,413	16%
1912	5,554	929	19	6,502	14%
1913	6,630	1,758	31	8,419	21%

注記：横浜正金銀行上海支店の貸出には滞貸金が含まれていない。

出所：表2と同じ。

貸出業務は一九〇五年～〇六年に急増したが、その後一九〇九年までにかけて減少し、一九一一年からは再び増加に転じた。正金の貸出の変動幅はHSBC・CBと比較して大きかったことが同表からわかる。その背景には、一九〇六年五月に天津支店・北京支店の余剰資金、為替資金が上海で運用されたことや、貿易の不振による為替業務の低迷で資金が貸出業務として運用されたことがある。正金の貸出業務の中での当座貸越残高の割合は、HSBC・CBと比較して目立って低かった。当座貸越では基本的に信用の

表5 外国銀行上海支店のチョップ・ローン貸付残高(1908年) (単位：千上海兩)

月	日	正金	CB	HSBC	その他	合計
1	25	240	90	72	1,808	2,210
2	25	1,450	420	200	4,900	6,970
3	28	2,070	470	2,977	7,970	13,487
4	16	3,260	750	2,994	9,410	16,414
5	30	3,920	920	1,650	11,910	18,400
6	27	4,400	1,050	1,170	12,250	18,870
7	25	4,450	890	1,630	12,780	19,750
8	29	4,520	890	1,710	13,900	21,020
9	26	4,600	840	880	11,460	17,780
10	31	1,040	930	580	7,550	10,100
11	28	110	0	190	2,000	2,300
12	24	0	36	36	352	424

出所：Shizuya Nishimura, 'The Foreign and Native Banks in China: Chop Loans in Shanghai and Hankow before 1914', *Modern Asian Studies* 39, no. 1 (2005)より作成。

ある商社や個人にのみ信用供与が行われる。貿易に関連する貸出では、事前に融資高が確定できる輸入と関連する業務についてはローンの形を取り、商品を仕入れる前に融資を受けるといふ輸出と関連するものは当座貸越という形で行われるのが一般的であった。HSBCの場合、一九一五年一月、三〇〇〇以上ある当座口座のうちの約四〇〇の口座が当座貸越を受けた。こうした当座貸越において不動産と株式が担保の六一%に上った。<sup>(14)</sup>すなわち、この時期において英租界の土地や株式は銀行担保として大変重要であ

ることをうかがうことができる。英系銀行と違って、上海株式市場<sup>(15)</sup>と関連の薄かった正金は、不動産を抵当とする貸付を行わないという経営方針を取っており、当座貸越を通じて有力な貸付先へ資金供与を行うよりも、定期貸付金という形で貸出を行った。

定期貸付金の貸付先は商人のほかに、伝統的金融機関の銭荘である。銭荘への短期貸付はチョップ・ローンと呼ばれ、こうした貸付は無担保で通常は一日〜二日の短期間のものだが、貸し手は自分の都合でいつでも回収できるのが特徴である。こうしたチョップ・ローンは外国銀行の上海金融市場に対する支配の手段と考えられがちであった。しかし、西村閑也の研究によって明らかにされたように、最有力のHSBCが実際にはチョップ・ローンの貸付には非常に慎重であった。HSBCのチョップ・ローン貸付高が同行上海支店貸出残高に占める割合は約5%にすぎない<sup>(16)</sup>。これに対して、表5に示されたように、一九〇八年六月末の正金上海支店のチョップ・ローン貸付金額は大きく、同貸付が同行上海支店貸出残高の八〇%にも達している。同行がチョップ・ローンへ重く傾斜していたことが分かるであろう。チョップ・ローンに関して、正金は「一見危険ノ

觀アルモ、買弁ノ周到ナル注意ト又支那銀行組合ノ嚴重ナル規約及共済ノ慣習トハ、各外国銀行ヲシテ安神シテ巨額ノ放資ヲ敢テセシメ、曾テ何等不都合アリタルコトナシ<sup>(17)</sup>との見方を持ち、それが安全な融資だと考えていたようである。チョップ・ローンの貸付金利はどうであったろうか。H S B C側の資料では、正金が市場金利でチョップ・ローンを与えており、他の外国銀行よりも低い金利で貸し付けたと書かれている<sup>(18)</sup>。これが同行上海支店の収益を低くした要因の一つと思われる。もともと、一九〇八年末、上海での金融逼迫により、正金はチョップ・ローン貸付の大半を回収した。それを契機に同行のチョップ・ローン貸付は大幅に縮小した<sup>(19)</sup>。ちなみに、錢莊による外国銀行へのチョップ・ローン供与が少なかったのはなぜであったか。正金の東洋支店長会議録では、買弁組合の協議に基づき、チョップ・ローンを仲介する買弁は借り手から年利一・五%の手数料を徴収すると書かれている<sup>(20)</sup>。このことから分かるように、上海金融市場において外国銀行が錢莊に対して優位にあったとは言えない。

## おわりに

これまで検討してきたように、二〇世紀初頭以降の正金の上海での経営は、先発のH S B CやC Bを意識しながら、預金金利の引き上げを通じて預金を集め、積極的に銀行券を発行した結果、急速に規模の拡大を達成し、H S B CやC Bの成長を抑制したと考えられる。しかしながら、H S B CやC Bと比べて在上海の商人との取引関係が希薄な正金は、有力な貸付先を持たず、貿易不振を契機とした資金余剰を流動性の高い短期貸付へ傾けた。それは経営リスクを高めただけでなく、その収益性を著しく低下させたのである。

石井寛治氏の研究<sup>(21)</sup>によれば、同時期の正金の収益率・配当率はH S B Cを大幅に下回り、日露戦争後には配当率においてC Bにも凌駕されるようになった。ここで分析してきた上海支店に関しても同じことが言えるのではなからうか。

(1) ここでは一九八〇年代以降に出版された論文や著書を取り上げる。小島仁『日本の金本位制時代』(日本経済

- 評論社、一九八一年)、平智之「第一次大戦前の国際金本位制下の横浜正金銀行―日銀の兌換維持政策との関連において―」(『金融経済』二〇八号・二〇九号、一九八四年)、斎藤寿彦「横浜正金銀行の本来の外国為替銀行化過程」(『三田商学研究』二八巻五号、一九八五年)、斎藤寿彦「日清戦争以後における横浜正金銀行の外国為替業務の発展と信用」(『三田商学研究』二八巻六号、一九八六年)、石井寛治『近代日本金融史序説』(東京大学出版会、一九九九年)、横内正雄「第一次大戦前における横浜正金銀行ロンドン支店―準備的考察―」(東北大学『研究年報経済学』四六巻三号、一九八四年)。
- (2) 平智之「日本帝国主義成立期、中国における横浜正金銀行」(東京大学『経済学研究』一五号、一九八二年)。同論文の利付手形の数値の問題点に関しては石井寛治、前掲書、一三四頁に参照。
- (3) Shizuya Nishimura, "The Foreign and Native Banks in China: Chop Loans in Shanghai and Hankow", *Modern Asian Studies*, 39, 1, 2005.
- (4) 資料の収集にあたって、HSBC Group Archives のアーカイブストであるEdwin Green 氏とSara Kinsley 氏の多大の協力や、また西村閑也氏のCBに関する資料の提供を受けた。記して感謝の意をあらわしたい。
- (5) 大蔵省『大日本外国貿易年表』の当該年度を参照。ここの中国は関東州、香港を含んでいない。
- (6) 第一回東洋支店長会議録。
- (7) Inspector's Report on Shanghai Branch, 1913, HSBC Group Archives.
- (8) 中国人民銀行上海市分行編『上海錢莊史料』(上海人民出版社、一九六〇年)五九―六〇頁。
- (9) 「上海デ紙幣ヲ出シマシタトキニハ、道台ノ興味書ヲヤウナモノヲ得マシテ、ソレヲ広告モシ、又支那ばんくヲモ使ヒマシテ支払ニ大変使ツテ貫ツタコトモアリマス」(第二回東洋支店長会議録、一三七―一三八頁)。
- (10) 郭予慶『近代日本銀行在華金融活動―横浜正金銀行(1894-1919)』(人民出版社、二〇〇七年)一九五頁。
- (11) 第二回東洋支店長会議録、二六四頁。
- (12) この時期に上海に流通している弗(銀元)はメキシコドルが基準となっている。
- (13) 第二回東洋支店長会議録。もともと、同じ一九〇八年頃、中国通商銀行以外の中国系銀行が続々と銀行券を発行し始めた。中国商人によって作られた上海総商會という商業會議所が北京の公使団へ抗議を申し入れ、その結果、中国系銀行の銀行券発行が増大し、外国銀行の発行を大きくけん制したのである。
- (14) Inspector's Report on Shanghai Branch, 1916, HSBC Group Archives.
- (15) 拙稿「清末上海における事業投資とその資金調達―ゴム株式恐慌(一九一〇年)に至る過程を中心に―」(『社会経済史学』六三巻五号、一九九七年)に示されるように、正金は上海での上場企業への資金供与を行っていない

かった。

- (16) Shizuya Nishimura, *op.cit.*
- (17) 第一回東洋支店長会議録。
- (18) Shizuya Nishimura, *op.cit.*
- (19) 第二回東洋支店長会議録。
- (20) 「Chop Loan ノ利率ニ就テ申サンニ買弁ハ保証料ノ意味ニテカ、各銀行買弁申合セノ上、Chop Loan ニ対シ、日歩四厘ノ利差ヲ収ム。即チ銀行ニ対スル Chop Loan 日歩壹錢 (3.5/8%p.a.) ノ時ハ借先ヨリ實際壹錢四厘 (5.1/8%p.a.) ヲ取り立テ居ルナリ故ニ上海支店カ市場ヨリ Chop Loan ニテ借入金ヲナサントスルトキハ日々ノ報告ニ係ル利率ニ約1 $\frac{1}{2}$ %ヲ加ヘタルモノニアラサレハ能ハスト承知アリタシ。外国銀行カ市場ヨリ借金スルハ敢テ珍ラ敷事ニ非スシテ、昨年末香上銀行サヘモ約二百万兩 (8% Pa.) ニテ一カ月借入レタリ、露清モ同シク借入レタリ、上海支店買弁ノ言フ所ニテハ何時ニテモ三百万位ハ借得ルトノ事ナリ然レトモ Chop Loan ニテ大金ヲ借ルハ危険少カラナルカ故、期限ヲ定ムル方望マシキナリ」(第一回東洋支店長会議録)。
- (21) 石井寛治、前掲書、二五九〜二六〇頁。

(しゅう まんはん・大阪経済大学日本経済史研究所研究員、  
同大学非常勤講師)